随想

哲学とは

～『新しいことを見つけたい』という意欲を持ち続けること～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

　筆者が中学生から高校生のころ、若者はよく書物を読んだ。青春時代は迷いが多いという。筆者が大学生となった時分には、哲学にのめり込む人が、書物に没頭した上で人生について考え込み自殺してしまう、といったことが時にニュースとなっていた。

　筆者にとって、人生を捨てるという究極の選択はいかにもおどろおどろしく、哲学とはそうした危険な道への入り口であるような気がしたものである。

　高校二年生の時に、当時の社会科の先生から《何でも良いから一冊本を読み、読後感想文を書く》という宿題を出された。そこで筆者は、父が小学六年生のときに買い与えてくれた《君たちはどう生きるか：吉野源三郎著（注）》という本を改めて読み直して、高校生としての印象を書き述べて提出した。

　当時から論文形式の記述課題を得意とする生徒は非常に少なかったようで、提出したレポートに対する先生の評価が高く、クラスメートは目を見張っていた。

　くだんの先生は、どのような教育的意図をお持ちであったのかはわからない。ただ、かなり激しい方であった。ちなみに当時の行政はすでに米の生産調整に入っており、生産調整で出る農家の損失を税金で埋める、という矛盾を取り上げてわれわれ生徒に教えるに当たって、政治への憤りが露骨に現れ、当事者でない生徒へ怒りをぶつける、といった理不尽なことがたびたびあった（考えてみると、米作生産調整の歴史はこれほどに長きにわたっている、ということである）。こうした授業の性格で、クラスメートたちのこの先生に対する評価は相当に低かった。

　この先生はしばらくして《何でも良いから一冊本を読み、読後感想文を書く》という宿題を再度出された。

　この時には、筆者はなぜかちょっと違ったテーマについて書きたくなった。そこで、担任であった英語の先生に、何をテーマにすれば良いかと教えを乞うた。

　担任の先生が『この本はどうか!?』と貸してくださったのが、何と《ニーチェの実存論》であった。

　先生曰く『大学の時に読んだ本』だそうである。

　今考えても、何が書いてあったのかよくわからないが、とにかくひたすら読んでは考え、また読んでは考え、一か月ほどの指定期間に三分の二ほどについてレポートを書いて、未完として提出した。社会科の先生は《非常に高い評価》を下さったが、正直書いた本人に書いている意味がわかっていたとは思えない。

　突然降って湧いたような成り行きで哲学に触れることになったが、だからといって哲学に親しみを覚えることもなく、そのまま大学へ進学、専門への道を歩んで臨床獣医師となった。

　《哲学とは何か！》というテーマに再び向かったのは、社会人として二年ほど過ぎたころ。

　哲学とは《物事の筋道を立てて考えることである》と学んだ。難しいことではない。生きていくためには何かをせねばならない。誰にとっても当たり前のことで、何かをするときに《真摯に取り組む》という姿勢があれば良いということであると教えられた。

　二五才の時につまらないことで悩んだ。筆者についた後輩を育てようと一所懸命であったのだが、後輩には伝わらず、大学の先輩であった助教（授）に『せっかく付けた後輩をつぶす気か！』となじられたのが原因である。若く一途であった筆者にとっては大問題で、かつ解決の方法が見つからない。考えて、考えて、考えた。

　結果、得た答えは《自分の心に嘘をつかない生き方をしよう》という簡単なことである。

　それから一五年たって、与えられたテーマ《ニューカッスル病の病理学的研究》で博士の学位を得た。博士を**Ph.D.（Philosophical Doctor）**という。**Philosophy**とは哲学のことであり、博士とは哲学を極めた学徒ということになる。そして、**Philo**とは知識のこと、**sophy**とは好む、という意味であり、哲学とは知識を好む、つまりは《勉強が好きだ》ということに過ぎない。『新しいことを見つけたい』という意欲を持ち続けること。単にそれだけのことを大袈裟に《哲学》と呼んでいるに過ぎない!!

　そんな単純なことにやっと気づいた。やはり凡人は凡人だけのことがある。

・・・・・・・・・・・・・

注：この書物は、筆者の長女が小学六年生の時に思い出して買い与えた。その長女が大人となり随分とたった二〇一七年に、羽賀翔一氏によって漫画化（マガジンハウス刊）され、二〇一八年三月には累計二〇〇万部を突破するという大ヒットとなったため、長女が改めて驚いたという逸話がある。正直、昭和二十九年という、六十五年も前に筆者に買い与えた、わが父親の先見性に舌を巻く。明治生まれはすごい！